



## 由緒のあるふるわりのお社

### 一之宮神社(鹿児島市郡元2丁目)

NPO法人かごしま探検の会 東川隆太郎

一之宮神社は鹿児島三社のひとつである。三社というのは、まず一の宮の当社。二の宮が鹿児島神社で、三の宮が川上天満宮である。この三社の位置づけは、江戸期、藩主が正月に参詣した順とされている。

御祭神は大田雲貴命こと天照皇大神で、かつては郡本社とも呼ばれていた。また、かつては猿田彦大神や豊玉姫など九柱の祭神も祭られていたとされている。

一之宮と称するようになった時期は不明だが、貞享5(1688)年に棟札には「一之宮大明神」とも名が記されている。当社には、薩摩国の一之宮である枚聞神社(現在の指宿市)の末社としての位置づけもある。当社の近くを旧街道が通るが、この街道は指宿方面に向かうものである。その枚聞神社も一之宮であったことから混乱が生じるために、一條宮と称された時期もあったという。1月3日には打植祭と称して、春のお田植神事が催行される。お田植神事鹿児島県内では2月に行われることの多い行事で、正月に行われるのは珍しい。小さな木像の牛が登場し、子供らがその牛を連れて境内を廻る。その後田おこしをし、苗に見立てた松葉で参拝者と共に田植が行う。現在、周辺は住宅地であるが、かつては街道沿いに田園が広がる地域であった。そのためにも神事としても田植が行われるのだらう。

なお境内の隣接地には、一の宮遺跡として弥生中期の住居跡が保存されている。当地の標高は約8メートルで、遺跡は県指定の史跡。昭和25年の発掘で竪穴式住居が4棟確認された。現在はその1棟の円形住居が、当時の様子を理解できるようにフェンスで囲まれた状態で保存されている。土器には稲刈りに使用したとされる磨製の石斧や石包丁も出土している。ここで暮らす弥生人たちは、田上川などの水を利用しながら稲作を行っていたのであろうか。

また、社殿裏手には、明治2年の廃仏毀釈以前まで別当寺であった延命院に関する古石塔などが点在している。そのなかには人間の背丈ほどの石塔があり、隆盛を誇った寺院であったことを静かに伝えてくれる。ほかにも境内には県指定文化財の大永5(1525)年銘の板碑もあり、地域の様々な時代の歴史にふれることのできる神社といえる。

# 鹿児島商工会議所青年部(YEG)活動紹介

## 青年部11月例会開催

令和6年11月27日(水)に鹿児島商工会議所青年部では令和6年度11月例会を開催しました。



11月例会を開催

例会終了後の懇親会(魚将さかなちゃん)では、11月3日(日)に開催されたおはら祭2024に鹿児島商工会議所青年部として参加した際の動画が上映され、参加頂いた皆様と祭の思い出を語り合う機会となりました。大変にぎやかな会となりました。



祭の思い出を語り合う

10月のおはら祭など、様々な行事が開催される中、鹿児島商工会議所青年部は勢い全開で走り続け、それぞれの青年部活動を盛り上げていきます。



参加者の記念撮影

## 青年部12月例会開催 『大忘年会〜団結の向こう側へ〜』

令和6年12月9日(月)に令和6年度鹿児島商工会議所青年部12月例会『大忘年会〜団結の向こう側へ〜』が城山ホテル鹿児島島で開催されました。



笠毛会長の挨拶

令和6年度青年部会長である笠毛寛大君の挨拶をはじめ、多くの来賓の方々挨拶をされ、また抽選会もあり大いに盛り上がりました。

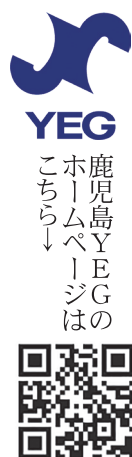


大盛り上がりの抽選会

このほかライブショーなども行われ、大盛況のうちに幕を閉じました。



参加者一同で記念撮影



# 潮流を読む

## 「なぜ日本の少子化対策は十分ではなかったのか」

急速な少子高齢化により、人口減少が中長期的に著実に進展することが見込まれている。直近2023年の国立社会保障・人口問題研究所の推計〔注1〕では、約30年後の2056年に総人口が1億人を下回り、2065年に9159万人となる。特に、少子化が人口減少に与える影響は大きい。1989年の合計特殊出生率（以下出生率）〔注2〕が、それまでの最低を更新したいわゆる「1・57ショック」（90年）以降、政府はさまざまな少子化対策を実施してきたが、出生率の低下は歯止めがつかっていない。地域格差も拡大している。現政権も少子化対策を前面に打ち出している。

少子化の現状について、直近の厚生労働省の統計〔注3〕で確認する。75年に出生率が2・0を下回り始めてから低下傾向となり、2005年に1・26と底を打ち、14年頃までは緩やかな上昇を示していた。しかし、それ以降は再び低下し、23年には1・20となり過去最低を記録した。出生率でも、23年は過去最低の72・7万人となり、70万人割れが目前となっている。過去の推移を見れば、第二次ベビーブームが終わった1974年以降、出生率低下傾向をたどり、2016年に97・7万人と、100万人を割ってから7年連続で減少し、16年から23年までトータルで25万人減少した。

それにもかかわらず、総人口は、出生率および出生数が低下し始めた1974年から、総人口のピークを迎え1億2808万人となった2008年まで、30年以上にわたって増加が続いた。これは「当時は『正の人口モメンタム』と言われる出産期の女性が多い人口構造であったことから、人口は増加し続けた」

〔注4〕とされている。しかし、現在の状況はこれとは逆で「出産期の女性が少ない」「負の人口モメンタム」が生じているため、出生率の回復にかかわらず人口が中期的には減少する〔注5〕とされている。なぜ、「負の人口モメンタム」が生まれたのか。確かに、この30年、政府は少子化対策をしてこなかったわけではなく、依然、中期的に人口は減少することが推計されており、対策は十分ではなかったといえる。

なぜ対策は十分ではなかったのであろう。それに関して、出生率において気になるデータがある。前述の厚生労働省の統計で15年以前の出生数の推移を見ると、いわゆるバブル経済がはじける前の1989年の124・6万人から2015年までの26年間で24万人減少した。これは16年から23年の減少スピードの約4分の1の遅さである。一方、1989年以前の減少スピードは速く、例えば、89年から89年の6年間で出生数は150・8万人から124・6万人に26万人減少した。それ以前でも74年の202・9万人から77年の175・5万人と、3年間で27万人減少した。団塊ジュニア世代が出産適齢期であったことを考慮しても、出生数が26年かけて24万人減少した89年から2015年は特異な期間に見えてくる。

この期間において結婚適齢期を迎えている世代はさまざまな呼称が付き、ある意味、世代が多様化したといった時期といえる。しらべ世代（1955年前後に生まれた世代）、新人類（60年頃生まれ）、バブル世代（65〜70年頃生まれ）、団塊ジュニア世代（70〜74年頃生まれ）、ゆとり世代（87〜2004年頃生まれ）〔注6〕などが挙げられる。また、バブル経

済崩壊後の失われた30年といわれる経済・社会基盤が不安定化した時期でもある。各世代は価値観が多様化したものの、同時に基盤が不安定であったことから、世代の価値観に対する迷いが深まったことが考えられる。これらが出生率の低下が長期間にわたり続いた要因ではなからうか。

その一方、「団塊の世代」（1947〜49年頃生まれ）では社会・経済基盤は不安定であったが、高度成長期であり、「二億総中流」〔注7〕など画一的な価値観の醸成がなされていたと考えられよう。ちなみに、この団塊の世代という名称は、堺屋太一著の小説『団塊の世代』に由来する。ここでの「団塊」とは、出生数のポリウムが相対的に多く、人口ピラミッドの中で丸みを帯びて突出した塊になっているという特徴を表している。これに対して、前記の26年間は、世代の「命名」の通り、価値観が多様化し、各世代のポリウムは小ささいが、異なる特性を持つ塊であったと考えられる。この間、政治家の間では、地域格差、所得格差などへのさまざまな予防的対策が声高に唱えられていたものの、異なる特性への対策ではなく、画一的な規制撤廃、現金給付など人気取りの政策が目立った。それよりも、この本質的な多様化する世代の価値観に対し、網羅的かつ効果的に寄り添うことを優先すべきではなかったか。それを踏まえて、冷静かつ客観的に少子化対策を検討し、これからの世代が自発的にコミットできるような対策を講じることが必要であろう。

（2024年12月9日執筆）

〔注1〕出所は「日本の将来推計人口（令和5年推計）」（2023年4月26日）。総人口は、令和2年国勢調査による1億2615万人が2070年には8700万人に減少すると推計（出生中心・死亡中心推計）。国立社会保障・人口問題研究所は、令和2年国勢調査の確定数を出発点とする新たな全国将来人口推計を実施し、その結果を公表。〔注2〕その年次の15〜49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、1人の女性が

その年次の年齢別出生率で一生の間に生むとしたときの子ども数に相当する。〔注3〕「令和5年（2023）人口動態統計（確定数の概況）」（24年9月17日）〔注4〕松浦可「少子化対策の30年を振り返る」『日本労働研究雑誌』24年7月号18ページ〔注5〕注4と同様31ページ〔注6〕各世代の呼称および生まれた年代は説により異なる場合がある。〔注7〕旧総理府による「国民生活に関する世論調査」で、自分の生活水準を「中の上」「中の中」「中の下」とする回答が7割以上であったことなどを根拠に、1970年代からいわれるようになった。



内野 逸勢  
（うちのはやなり）

### PROFILE

静岡県出身。1990年慶応義塾大学法学部卒業。大和総研入社。企業調査部、経営コンサルティング部、大蔵省財政金融研究所（1998〜2000年）出向などを経て現職（金融調査部 主席研究員）。専門は金融・資本市場、金融機関経営、地域経済、グローバルガバナンスなど。主な著書・論文に『地銀の次世代ビジネスモデル』2020年5月、共著（主著）、「FinTechと金融の未来〜10年後に価値のある金融ビジネスとは何か?〜」2018年4月、共著（主著）、「JAL再生 高収益企業への転換」日本経済新聞出版、2013年1月、共著。IAASB CAG（国際監査・保証基準審議会 諮問・助言グループ）委員（2005〜2014年）。日本証券経済研究所「証券業界とフィンテックに関する研究会」（2017年）。

株式会社 大和総研  
金融調査部 主席研究員  
内野 逸勢

trend communication

ト  
レ  
ン  
ド  
通  
信

## 「京都土産の三つの『し』」プラスアルファに学ぶこと

先日、京都を訪ねた人からお土産に、小分けになった漬物数種類と小さな缶に入ったお茶をいただきました。それを見て「さすが京都だな」と感じました。

その漬物は、しば漬けやすぐき、しその実漬け、福神漬けなどが20g前後に小分けされてプラ容器に入っていました。漬物は10種類ほどあり、バラで買うことも何種類かのセットで買うこともできるそうです。1人あるいは2人で一食を使い切れて、いろいろな漬物を試せるサイズと使い勝手です。それぞれのプラ容器は透明ですが、シールは水色、ピンク、黄色とカラフルでかわいらしい見た目になっています。常温で持ち運べるようにしている点も土産物として優れています。

小さな缶にティーバッグを入れた土産物は、京都ではいくつものメーカーがつくっています。いずれも缶のデザインや色使いは現代調でありながら、歴史と伝統を感じさせる要

素を盛り込んでいます。おしゃれで小さく・かわいく、京都らしいものに仕上がっています。

私見ですが、京都や金沢、鎌倉といった古くからの観光都市で売られているお土産は、全体的に商品企画やパッケージデザインが優れていると感じます。それは長年の競争と淘汰（とうた）のたまものでしょう。中でも京都でヒットしている商品は、京都らしさを象徴する「歴史」「癒やし」「おもてなし」の三つの「し」を押さえた上で、現代の生活者にも使い勝手が良いように配慮されています。

小分けやティーバッグに代表されるような使い勝手の良さは、その時代によって求められる内容が変化します。1世帯当たりの人数がもともと多かった時代では、小分けよりももう少し大きなものが喜ばれたでしょう。また、先に挙げた三つの京都らしさについても、ターゲットとする人の違いで重視されるものが変わって

きます。「歴史」と「おもてなし」は変わらないかもしれませんが、人によつては「学び」であったり「驚きと感動」であったりします。また、単にモノとしての消費よりも体験を重視する人もいるでしょう。

今回の漬物の小分けが良くできていると感じた理由に、この商品のコンセプト自体がお客さんの「次のアクション」を誘発していることもあります。そもそも土産物は、指名買いやリピーターを除けば、それまで顧客ではなかった人をつくり手の新たな接点、だといえます。小分け・多品種の商品は、それ自体が店頭における試食品のようなもので、試した中でどれか一つでも気に入ってもらえれば、次の購買につながります。すぐに京都を訪れる機会がなくてもネット通販で買え、各地の取り扱い店舗でも買えます。

そういう意味では、お土産用につくられた商品は優れた営業パーソンのようなものといえます。そして小

さく・かわいらしく、運びやすく、シェアしやすいことが重要なのです。100年を超える老舗が歴史や伝統を守りながらも、デザインや商品企画を洗練させて、現代の消費者の求めるものを押さえています。そんなところに京都の底力を感じます。

日経BP総合研究所 上席研究員

渡辺 和博



**Watanabe Kazuhiro**

わたなべ・かずひろ

## PROFILE

日経BP総合研究所 上席研究員。1986年筑波大学大学院理工学研究科修士課程修了。同年日本経済新聞社入社。IT分野、経営分野、コンシューマ分野の専門誌編集部を経て現職。全国の自治体・商工会議所などで地域活性化や名産品開発のコンサルティング、講演を実施。消費者起点をテーマにヒット商品育成を支援している。著書に「地方発ヒットを生む 逆算発想のものづくり」(日経BP社)。